

「癌患者の症状のコントロール」

武田文和 編集
石垣靖子

本書は、編者が力説することく、まさに現在のわが国の癌臨床実践者たちの苦闘の証として提供された実践の書である。

癌患者は、癌の専門施設に限らず大学病院から小規模医院にまであふれている。患者にとっては、すべての医療者は癌の専門家であってほしいと願っていると言っても過言ではないであろう。癌の病態に対する研究は急速に進み、人々に多くの恩恵をもたらしているが、癌を持つ人に焦点を当てた専門書は数少ない。本書は、「癌患者の症状のコントロール」を表題としているが、つまりは癌患者に特有の症状を治療の対象として、症状がもたらす患者の苦痛を理解し苦痛を取り除くために、全人的観点からの適切な処方の実施についての解説書である。

病人にとっては、癌そのものが消滅し我が身が救われることが第一であるのは当然であるが、当面の苦しみが終わることは、自分自身を取

り戻すうえで最も重要なことである。症状コントロールは、癌患者の病態をどのように制御できるかというところにかかわるであろうが、1つの症状コントロールは、1人の患者の問題解決といった面を含んでおり、一律に誰にでも同様の効果を期待できないという面を含んでいる。そしてこのことが癌患者の症状コントロールの問題の難しさと重要性を示していると言える。本書は、多数の症例経験を有する著者らが、多くの患者との出会いとケア研究を通して得た成果を、真摯な態度で示している。

本書の構成は、第1章“癌患者のみかた”，第2章“症状コントロールのしかた”，第3章“癌患者の在宅ケア”，第4章“家族ケア”となっており、癌患者のケア全般にわたっている。第1章は、癌患者をケアする人々にとって、最も基本となる事柄が書かれており、本書を貫く精神基盤が示されている。癌患者をケ

アする人なら一度は読み通してほしい部分である。本書の真髄は第2章で、痛み、食べることの障害、排泄の障害、眠ることの障害、発熱、皮膚症状、呼吸器の症状、口腔トラブル、心理的变化への対応、栄養と食事、コルチコステロイドの使い方、臨死患者のケア、の12項目にまとめられている。各項目は、解説や専門知識のほかに、◆症例から学ぶ、◆ケアのポイント、◆Q&Aの項が設けられており、実例を示し、必要事項やケア内容を簡潔に記し、現実的な臨床場面でのやりとりを質疑応答の形式で示して、実践マニュアルとしての利用範囲を広げる努力をしている。

症状コントロールのノウハウは、自分の患者に実践して初めて会得していくものであろうが、本書はマニュアルまたはガイドラインとして手近かに置いて利用するのに最適であろう。本書に示される実例は、自分のケースに当てはめ、安心して自分なりの工夫をするゆとりを与えてくれるであろう。

(千葉大学助教授・看護学部)
佐藤 禮子

●A5変型 174頁 図11 1991年
定価2,575円(税込) 円300円

医学書院 刊(☎03-3817-5657)